

啞娘

野村胡堂

一

「親分」

「何んだ、八。たいそうな意気込みじゃないか、喧嘩でもして来たのか」

錢形平次は氣のない顔を、八五郎の方に振り向けました。

「喧嘩じゃありませんがね、癩しやくにさわって癩しやくにさわって——」

「癩なんてものは、紙入に入れてよ、内懐うちぶところにしまい込んで置くも

んだよ。お前見たいに鼻の先へブラ下げて歩くから、余計なものにさわるじゃないか」

「へッ、まるで心学こころしやくの講釈だ。親分も年を取ったぜ」

八五郎は余つ程虫の居どころが悪かったものか、珍しく親分の平次に突つかかって行きます。

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、八五郎にきめ付けられるようじゃ、全く年を取ったかも知れないよ。ところで何がいったい癩うしにさわるんだ」

平次は無造作むぞうさに笑い飛ばして、縁側うしに後ろ手を突いたまま、空あおの碧あおさに見入るのでした。七夕たなばたも近くたなばた天氣が定まって、毎日毎日クラクラするようなお天氣続きです。

「だって、口惜しいじゃありませんか。三輪の万七親分が、先刻昌平橋であっしの顔を見ると、いきなり、『おや八兄哥、この辺にブラブラしているようじゃ相変らず銭形のところに居候かい。俺のところの清吉なんか、八兄哥より二つ三つ若い筈だが、この間から入谷に世帯を持って、押しも押されもせぬ一本立の御用聞だぜ。——尤もそこまで行くのは容易のことじゃあるまいがね——』と斯うだ」

「——」

「あんまり腹が立つから、いっそ十手捕縄を返上して、番太の株でも買おうと思ったが——番太の株だって唯じゃ買えねエ」

こんなに腹を立てている癖に、八五郎の調子には、吹出さずに居られない可笑味おかしみがあります。

「ハッ、ハッ、ハッ、笑つちや気の毒だが、腹を立てる度に番太の株を狙うのは、江戸中の岡っ引にも。お前ばかりだよ。どこかに良い後家附きの株でもあるのかい。——それはともかく、八五郎だって立派な一本立の御用聞じゃないか。こんど三輪の親分に逢ったら、そう言ってやるが宜い。親分のところに泊っているのは、田舎から姪めいが来て、向柳原の叔母の家が急に狭くなったからだ。手頃の貸家があるなら世話して下さいよ、家賃なんか糸目は附けないから——と言ったような具合にな」

「それくらいのことを言ったんじゃ、腹の虫が納まりませんよ」

「たいそう機嫌きげんの悪い虫だね。じゃ、三輪の兄哥がびっくりする

ような手柄を立ててよ、お神楽の清吉が目を廻すような女房を貰うんだね」

「そんなのはありますか、親分」

「大ありさ、江戸は広いやね。——綺麗きれいな女房の方は俺の鑑定めがね

じゃ納まるまいが、大きな仕事ならちようど良いのがあるぜ」

「へエ」

「例えば、近ごろ三輪の親分が追い廻している、痣あせの熊吉だ。下

谷浅草から神田小石川へかけて二三十軒も荒し、人間も五六人斬

られているが、どうしても捉まらねエ」

平次の言うのは尤もでした。去年の暮あたりから風の如く去来する怪賊、金高にして二三千両もかせいだことでしょうが、文字通り神出鬼没で、江戸中の岡っ引が、束たばになつて追ひ廻しても、何んとしても捉まりません。

「そいつはあつしも心掛けているが、首筋に火の燃えるような真赤な痣あざのある人間なんか、滅多に見付きりませんよ」

きようぞく

兇賊は何んの変哲もない小男で、黒い覆面をしたつきり、町人風の小氣のきいた様子で、たいてい宵よいのうちに入り、往来がまだ賑やかなうちに、何処ともなく逃げうせるのが特長とされており

ます。

もう一つの特長は覆面の下から見える左首筋に、小判形の真赤な痣のあることと、それから、恐しく手の利きくことと、身体が人間離れがしているほど軽捷けいしやうなことです。

「で、まるつきり見当が付かないのか」

「へエ、首筋に痣のある人間さえ見付かればワケはないんだが」

「馬鹿だなア——、何時までも、その気だから、三輪の親分なに嘗なめられるんだ」

平次は『此子「ししおし誨しおしゆべからず』と言った顔をするのです。

「外てづるに手蔓も引つ掛りもないじゃありませんか」

「じゃ訊きくが、自分の首筋に真赤な痣のあることを知らない人間はあるだろうか」

「ありませんね、鏡というものがあるんだから」

「覆面に顔を隠して、人の家へ押込おしこもうと言う太い奴が、首筋の赤い痣を隠すことを知らないとはどういうわけだ」

「なるほどね」

「痣なんか目当てに捜さがしちゃ、熊吉は一生捉らないよ。——これだけ言ったら、何んとか工夫のつけようがあるだろう。三輪の万七親分にあつと言わせるつもりで、熊吉を挙げて見るが宜い」

「へエ——」

平次は精いっぱいいっぱいの激励をするのでした。でもなければ、一本立になろうなどという望みを起す八五郎ではありません。

二

それから八五郎は、神田、浅草、下谷、小石川を隈なくくま捜し廻りました。が、痣あざのある人間を捜すのと違って、痣も何んにもない人間を捜すとなると、砂利じやりの中から石を一つ選り出すようしまで、まるつきり見当が付かなくなつて了います。

とうとう悲鳴をあげたのは五日目。

「親分、駄目ですよ。痣のない人間は江戸中に多過ぎますよ」

「馬鹿だなア、そんなことじゃ何年経ったって熊吉が拳るものか。何処をいったい捜し廻ったんだ」

「神田、浅草、下谷、小石川を一円」

「熊吉の荒して歩く場所ばかり狙ったのか。——そいつは、無駄だよ。江戸の町には木戸もあり番所もある。泥棒道具を持って夜更けに歩くのは骨が折れるだろう。痣の熊吉が宵の口ばかり狙って押し込むのは、遠いところから来て、遅くならないうちに自分の家へ引揚げるためじゃないか」

「なるほどね」

平次の狙いはさすがに非凡でした。

「俺は痣の熊吉の押込んだ家というのを、江戸の絵図面に印を付けて見たが、不思議な事に本郷を真ん中にして扇形おうぎがたに拡がっている」

「――」

「痣の熊吉は本郷では一軒も荒していないだろう。――これはどういうわけだ。解るか、八」

「解りませんよ。――それとも本郷は暗剣殺あんけんさつに当るかな――この方角はよろ、ず、の事悪し、火難盜難慎つづしむべし――と三世相に書いてある」

「無駄は止せ。——痣の熊吉は本郷に住んで居るんだよ、八」

「へエツ」

「地元を荒すと足が付くと思つてゐるんだらう。探すなら本郷を
捜せ」

「本当ですか、親分」

「ノラリクラリと暮している、金費いの荒い野郎を捜すんだ。悪
銭身につかずというくらいだ。盗んだ金を溜めて置く泥棒はない」

「成程ね。あつしなんか盗んだ覚えはないけれど金が身につかね
エ」

「身につく程の金が入ったことはあるめエ」

「違えねエ」

「また掛け合いばなしになる。——黙って聴け。痣の熊吉は雨戸を外したり、棧さんを切り取ったり、かなり器用なことをして忍び込むよ
うだ。宵のうちに、音のしねえように細工をするのは、道具の良
いを持ってに違いない。頑丈な鑿のみ、細い散目鋸ちらしめのこ、廻し錐きり、
——そんなものを持って歩く奴があつたら容捨をするな」

「——」

「それからもう一つ、熊吉には相棒がある。中へ入って仕事をす
るのは熊吉だが、相棒は外に見張って居て、邪魔があると合図を
したり、手に余ると助勢もするようだ。こいつは柄は大きい熊

吉ほどの腕はない。解ったか、八」

「解りましたよ。——あざ痣のない人間で、二人組で、本郷に住んでいて、金費いの荒いノラクラ者で、小道具を持って歩く野郎で、——そんなことでしょう、親分」

「毎晩家をあけることや、身軽で腕達者なことも忘れちゃならぬい」

「それだけ解っていれば、つか捉まえたも同様ですね、親分」

「そんな手軽なわけにも行くまいよ」

「それじゃちよいと行って縛って来ますよ」

「馬鹿だなア」

平次の言葉を背中に聴いて、ガラツ八はアタフタと飛び出しました。

三

それから三日目、痣あざの熊吉は相変らず諸方を荒し廻っておりませんが、ガラツ八の八五郎も、変なことから、思いも寄らぬものに心を引かれたのです。

それは、あれほど平次に注意されて、痣のある人間には振り向いても見ないつもりのガラツ八が、本郷お弓町のとある屋敷の前

で、痣のある人間に注意を囚とらえられてしまったのでした。

困ったことに、それは十八、九の美しい娘でした。湯から上ったばかりらしい、血色の良い顔に右の頤の下、ふくよかな線の、頬から喉へ流れるあたりに、ほんの四文錢ほどの丸い痣あざ——それも薄紫色をしたのが、はっきり見えているではありませんか。

ガラツ八はハッと立止りました。が、次の瞬間、この痣は『熊吉でない』という証拠見たいなものだということに気が付きました。熊吉は左首筋に、小判ほどの真っ赤な痣があると言われているのに、この娘は、右の頤の下——覆面でも冠かぶれば、ちょうど隠れる喉のどの上に、薄紫の小さい痣があるのです。

が、ガラツ八の驚いたのは、その痣の醜みにくさに引立てられるような、娘の美しさでした。十八九の、なよなよとした華奢立ちですが、色白で、眼が大きくて、吸い寄せられるような、不思議な魅力を感じさせる娘です。

ガラツ八の足はいつの間やら、娘の後を跟つけて居りました。それは、職業意識だったか、それとも浮気心だったか解りません。

「おや？」

娘の入ったのは荒れ果てた門の中でした。もう黄昏時たそがれどき、——ガ

ラツ八は四方の景色の凄まじさに驚いて、狐につままれたのではあるまいかと思つたほどです。

が、門の中に小綺麗なしもたやがあつて、五十恰好の召仕らしい女がいそいそと娘を迎えたのを見て、ホツと安心した心持になります。それはやはり出来の良い人間の娘に間違いありません。路地をグルリと表の方へ廻ると、荒れ屋敷の一方はかなりの構えでその入口に看板が掛けてあつて、『尺八指南、竹齋』と読めます。ちくさい

「御免よ」

ガラツ八はもう飛び込んでおりました。

「どなたでございましょう」

破れた障子の蔭から、濡ぬれた手を拭き拭き顔を出したのは、先

刻裏の方の家で、美しい娘を迎えたあの老女ではありませんか。

「尺八を稽古けいこしたいんだが」

咄嗟とっさの間、ガラツ八はそうでも言う外はありません。

「近頃は新しいお弟子を皆んなお断りしておりますよ」

「そう言わずに頼むぜ。尺八を稽古しなきゃ、男が立たねエことがあるんだ。師匠に取次いでくれ」

「でも」

老女は頑かたくなに首を振りました

「不意に來たからって怪しい人間じゃねエ。神田の八五郎という者だ。束修そくしゅうはいくらだえ。——樽代たるだいとか何んとかあるなら、そう

言つてくれ。憚りながら——」

ガラツ八は懐へ手を入れて財布の中の錢を読みました。

『憚りながら金に糸目は附けねエ——』とやるところでしたが、財布の中に残っているのは、四文錢がたった六枚。これじゃろくな蕎麦そばも喰えませぬ。

「おい、お六。折角そう仰しやるなら、お通し申すんだよ」
奥から錆さびのある男の声が掛りました。

ようやく通されて見ると、中の調度の思いのほか立派なのにガラツ八は肝きもを潰しました。家も外は思いきり荒れておりますが、中は畳建具は言うに及ばず、床も天井も張り直して、眼の覚める

よくな清々しさ。

「尺八が執心しゅしんなそうで、及ばずながら御相談相手になりましたよ。

——前々から大分おやりでしような」

主人は三十二三、大町人の若隠居わか隠居が、遊芸に打込んで、贅沢三

味の日を送っていると云った様子です。物言いの柔かさ、恰幅の立派さ、相對しているガラツ八は、何んとなく圧倒され気味です。

「いや、あつしは遊芸が大嫌いで、何んにもやったことはありませんよ」

ガラツ八はツイ正直なところを言ってしまった。本当に法ほ螺らも吹けない男です。

「それはどうも」

主人の竹斎もことごとく痛み入ります。

「ところで入門料はいくらでしょう」

八五郎は懐の四文銭六枚で足りなかつたらどうしよう——と言つた当り前過ぎることを考えながら斯う脈を引いて見ました。

「それには及びませんよ。どうせ道楽でやっていることで、——この節は御存じの通り、金があるからと言つて、ただで喰つて居られる世の中ではございません」

主人の竹斎はホロ苦い笑いを笑いました。その頃は浪人や無宿者の取締りがやかましく、足腰の達者な男は、何にか活計たつきの立つ

ような名目だけでも持つていなければならなかつたのです。

「それはどうも」

ガラツ八はもぞもぞしました。四文銭六枚が助かつたのは良いが、こう坐っていると、シビレがきれてやりきれません。

不意に、後ろの襖ふすまがあいて、黙つてお茶を出したものがありません。

「――」

ガラツ八は危うく声を出すところでした。それは二十二三の中年増で、色の浅黒い、目鼻立の整つた申分のない美女が、横顔を見せて逃げるように立去つたのです。

「これはどうも、へッ、へッ、へッ、へッ」

ガラツ八はすっかり恐悦きょうえつしてしまいました。先刻表から入った痣の娘も、今の中年増もこの家の者だとすると、全く妙なところへ飛び込んでしまったことになります。

四

「八、近頃は火吹竹ひふきだけの稽古だそうだな」

平次は早くもそれを聴き込んだ様子でした。

「へッ、変なことになりましたよ、親分」

「何が変なんだ。その火吹竹の師匠には、綺麗な妹が二人もあるというじゃないか、さぞ八五郎の稽古も精が出ることだろう」

「そんなわけじゃありませんがね」

ガラツ八は照れ臭く耳の後ろばかり搔かいております。

「尋常に申上げた方が宜いぜ。また変なのに引つかかると、叔母さんの心配の種だから」

「そんな怪しげなのじゃありませんよ。間違おおだないもなく大店の若隠

居が。道楽に尺八の師匠をしているんで、竹名は竹斎というが、本名は山城屋滝三郎というんだそうですよ」

「山城屋滝三郎？ 店はどこだ」

「大阪で」

「何んだ上方の衆か、上方訛りはあるかい」
なま

「ありませんよ。江戸の水が恋しくって、弟に世帯を譲って此方へ来たというくらいだから」

「妹二人も江戸言葉か」

「へエー、小さい妹——頤あごに痣あざのあるお雪というのが十九で。これはよく話しますが、姉の方の多与里たよりは二十三だそうですが、可哀想に物が言えません」

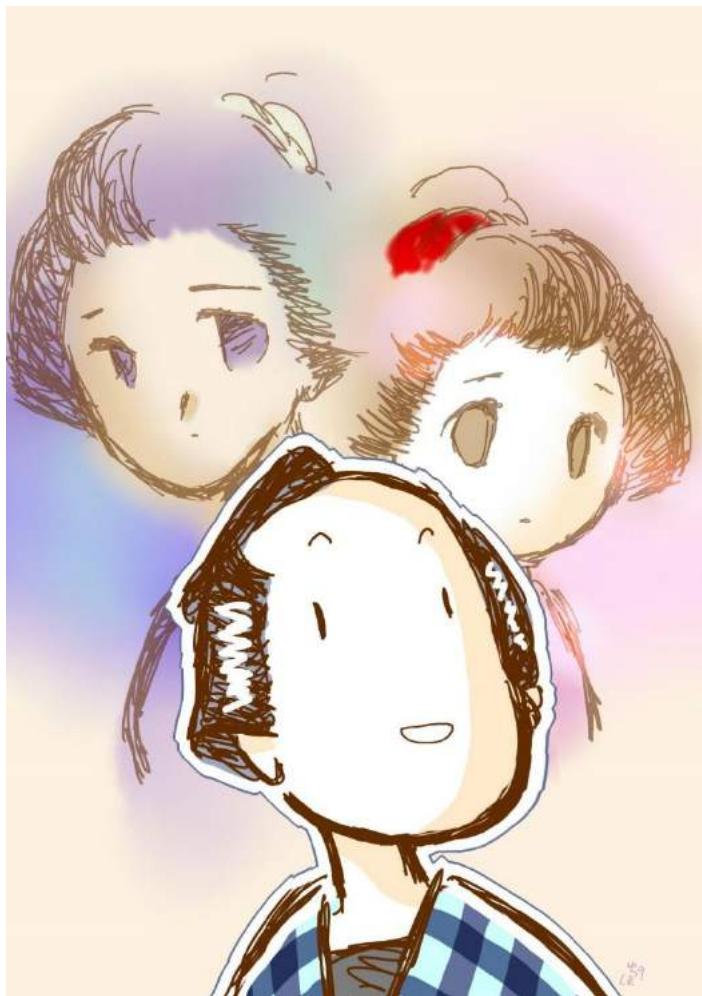
「フーム」

「啞おしですよ、親分」

「そいつは氣の毒だな」

「飛んだ良い娘が、可哀想じゃありませんか。一人は痣があつて、一人は啞で」

啞 娘



©2017 菽 柚月

「若い女は虫歯の痛いので可哀想に見えるんだらう。——ところで、そんな金持のくせに、尺八の師匠は物好きだな、弟子はあるのかい」

「四五人来るようです。門次、伊之助、三太、由松なんてのが」
「皆土地の者か」

「いいえ、この辺では顔を見たこともない人間で」

「まあ宜い、せいぜい火吹竹の稽古をすることさ。——総領は尺八を吹く面^{せんりゆう}に出来——か、川柳は面白いことを言うぜ。八五郎の顔も、鼻の下がだんだん伸びて来るから妙さ」

「冗談でしょう」

八五郎は平手でブルンと鼻の下をこき上げました。

「ところで、近頃は他国者がやかましい。ましてそんな豪勢な暮らしをする者は、何んとしても目に立つから、気が付いて黙って居ちやお上へ悪かろう。大阪へ問い合せて、一応身許を調べるから、山城屋の町所を訊いてくれ、大阪の弟のやつて居る店だよ」

「へエ」

ガラツ八は不足らしい顔をして出て行きました。

神田から本郷お弓町へ。——朝行つて昼過ぎに行つて、近頃は宵にもういちど行く熱心さですが、竹斎の滝三郎は大して持て余した顔もせず、尺八も吹けば法螺ほらも吹くと言つた気楽さで、ガ

ラツ八相手の一日を送って居るような有様でした。

その時はもう酉刻半むっはん近いころ、夏の日もとうに暮れて、四方は薄暗くなる時分でした。お弓町まで行くと向うへ行く男の姿が、何んとなく見覚えがあるようで、——近寄って声をかけると、紛まぎれもないそれは竹斎の滝三郎です。

そのころ流行った風俗ですが、一管かんの尺八を腰に差して、寛濶かんかつな懐ろ手、六法を踏む恰好で歩くのは花道から出て来る花川戸の助六や御所の五郎蔵と通うものがあります。

「お、八五郎親分、ちようど宜い塩梅に逢いました。一と足違いで出かけるところで——」

そう言いながら滝三郎は、脇差にした尺八をグイと後ろに廻します。太く逞たくましい一管で、それならば喧嘩道具にもなりそうです。

「ここでも話の出来ないことはないが——」

「まあまあそう言わずに入って下さい。一人で淋しいから出かけたところで、親分が来て下さればちょうど好い幸いに一本つけさせますよ」

愛想の宜い滝三郎は、豪勢な居間に通して、お六に酒の用意を命じます。

「他ほかじゃないが、近ごろ浪人と無宿者の取締りがやかましくなつて、他国者はみんな身許を書き上げなきやならない。いづれ師匠

のところへも調べに来る筈だが、あつしの手から届けて置くと、うるさいことがなくて済むかも知れない。——師匠の実家というのは、大阪の何処だろう。町所を言ってくれさえすれば宜いが——」

八五郎の言葉に、滝三郎はハツと顔色を変えました。

「それはわけもないが——」

「言つて困ることでもあるのかな、師匠」

「いや、困るほどの事でもないが身分はなるべく包んで置きたい。山城屋の主人と知れると、江戸には孫店も取引先も多いことだし、何彼とうるさい事にもなるから——」

それは暗い言い訳でした。八五郎の物を信じ易い心にも、四方あたりの贅沢な空気と対照して、主人の言葉の曖昧さが、大きな謎の塊かたまりりになるのです

「せめて明日まで待って下さい。妹達とも相談して、身分を明して宜いものか、悪いものか、はっきり極めましょう」

「そうして上げたいが、それが出来ない。というのは、師匠も知つての通り、あつしは御上の御用を承うけたまわるものだ」

「師匠の暮し向きの派手なのが、ツイ人の噂に上って、この暮し

に費う金がどこから出たか、錢形の親分も変に思つて居るのさ。今になつて、うっかり素姓を隠したり、金の出所を言わなかつたりすると、どんな疑いを受けるかも解らないが、宜いだらうな師匠

二人の美しい妹が、隣で息を殺して居るのを感じると、八五郎もツイこれだけの事を教えてやる氣になつたのです。

五

「それじゃ言い憎いことだが、何もかも打ち明けましょう。聴い

て下さい、八五郎親分」

滝三郎の竹斎は、膝に手を置いたまま、ジツと耳を澄しました。

夏の宵はまだ薄明るく、外を通る人のあしおと躑音が、何んとなくあわ

ただしいのさえ、この家一軒が、十重二十重に取囲まれているよ
うなさっかく錯覚を起させます。

「実は八五郎親分」

竹斎は続けました。

「この家は慶安の春、けいあん謀叛を企てて御処刑になった、丸橋忠弥の

道場の跡だ」

「えッ」

丸橋忠弥の道場がお弓町にあつた事は、語り伝えに聴いて居りますが、この敷地がそうとは、八五郎思いも及ばなかつたのです。

「私がこの家へ入つたのは一年前。いろいろ修覆しゅうふくして居るうちに、床下に穴蔵のあるのを見付け、何心なく入つて見ると、由井正雪の一味が隠したもののか、中には千両箱が三つ」

「――」
八五郎もあまりの奇怪な話に口を緘つぐんでしまいました。

「さつそく届出るつもりでいたが、そこは凡夫ほんぶの浅ましきで、金を見るとついフラフラとした心持になり、五両費い、十両取り、今では半分ほども、費つてしまいました。大阪の山城屋と言つた

のは全くの出鱈目、私はやはり江戸の生れで、唯の尺八の師匠竹齋に相違ございません」

「穴倉の中にはまだ二千両近い金が残って居ります。それをそっくり、親分に差上げましょう、さア」

これはどの重大事を、何んの蟠りもなく言つてのけて、滝三郎は手燭てしよくを取つて先に立ちました。

その後から二三步廊下へ出た八五郎、

「――」
後ろからそつと袖を引く者があるのです。

振り返ると小さい妹——あざ痣のあるお雪が、泣き出しそんな顔を
して、八五郎を拜んでいるではありませんか。

兄の滝三郎を助けてくれと言うのか、それとも、穴倉へ行つて
は八五郎が危いと言うのか、それは判りませんが、とにかく
も、八五郎ほどの男も、恐しい予感にゾツと身内の顫えを感じな
いわけには行きません。

「待ってくれ師匠。——そいつは俺が貰うにしても。今すぐとい
うわけには行かねエ。明日改めて貰いに来るから、一と晩だけは
その儘にしておいてくれ」

お雪の物悲しい瞳に引摺ひきずられるように、八五郎は出口の方へ外

れました。

「本当に貰って下さるか、八五郎親分」

「宜いとも、二千両と纏まとまれば、何んかの足しになるだろう」

何にかの足しどころではありません。その時分の二千両は、今の二千万円にも通用するでしょう。八五郎などは一生のうちに一度もお目にかかることの出来ない大金です。

「でもちよいと見て下さい。——親分」

「見るだけなら——」

ひきよう

卑怯ひきようと思われたくないで、一ぱいの八五郎は、滝三郎の後からまた穴倉の入口に引返しました。

物置の床を剥いで、暗いだんだんを下ると、中は石と材木で畳んだ道で、それを二三間行つたところに檜の朽ち果てた扉があつて、押し開けると中は四畳半ほどの黴臭い穴倉、一方の隅に寄せ、四つ五つ重ねた箱があります。

「この通り、二千両くらいはあるだろう。これは皆んな親分のものだ。持つて行きなさるとも、ここへ預かるとも勝手だが、この事だけは内々にして下さい。頼みますよ、親分」

箱の中から、山吹色も真新らしい小判をザクザクと掬いあげて、滝三郎は拝むのです。

もういちど八五郎の袖を引くもの、——振り返るとここまで跟

いて来たお雪は、大きな眼に一パイの悲しみを湛^{たた}えて、八五郎をさし招くのです。

六

「親分、驚いたの驚かねエの」

八五郎は息せきききって平次の家に飛び込みました。

「どうした、八？」

「大変ですよ、親分。ちよいと来て下さい」

「何をあわてるんだ。——お前があんまり尺八に凝^こるから、先刻

下っ引の辰を跟^つけさせたが、逢ったか」

「その辰に逢つて、お弓町の家を見張らせて来ましたよ。——何しろ小判で二千両でしょう。いや驚かねエの」

「俺の方が驚くぜ、尺八に憑^つかれたり、小判に憑^つかれたり」

「まず聴いて下さいよ、親分。斯うだ」

ガラツ八は夕方からの事を詳^{くわ}しく話しました。大阪の実家の事を訊かれて竹斎の滝三郎が面喰った様子、上役人や銭形平次が眼をつけていると知つて、観念したものか、丸橋忠弥の穴倉に案内してガラツ八に二千両の袖の下を掴ませ、事件をウヤムヤにさせようとした経緯^{いきざつ}、わけても妹のお雪が、兄を庇^{かば}うのか、八五郎の

身の上を心配するのか、涙を流さんばかりに拝んだ話まで——八五郎の口から聞くと、尾鱈おひれが付いて、なかなか面白くなります。

「そいつは大変だ。何んだって滝三郎を縛らなかつたんだ」

「丸橋忠弥の穴倉から金を出して費った廉かどで縛るんですか、親分」

「馬鹿だなア、丸腰忠弥の道場はどうの昔に取潰して、床の下まで掘り返した筈だ。そんな穴倉なんか残って居るものか、そいつは盗み溜めた金に決っているじゃないか」

「盗み溜めた？」

「滝三郎という奴は、痣あざの熊吉か、その一味だよ。さア、案内しろ、俺が行って見る」

「痣の熊吉は、左首筋に赤い痣のある小男でしょう。——滝三郎はホクロ一つない大男ですよ、親分」

「そんな事はどうだって都合が付くよ。こうして居るうちに、ず、らかったらどうするんだ。さア、来い、八」

「だって親分」

いつもは獵犬のように勇む八五郎が、二の足も三の足も踏むのは、お雪と多与里姉妹の平和な生活を驚かすに忍びなかつたのです。

併し、親分の平次が行くのを、八五郎は引止めようはありませんでした。

「辰、変りはないか」

お弓町に着くと、竹斎の家の前に、番犬のように頑張つて居る下っ引の辰に、平次は声を掛けました。

「何んの変りもありませんよ、親分」

「出た者も入った者もないだろうな」

「へエ」

「さア、八、威勢よく叩くんだ。——辰は裏へ廻れ、一人も外へ出すんじゃないよ」

「へエ」

平次は八五郎に叩かせましたが、何時までやっけていても、中か

らは返事もなく、開けてくれる者もありません。

「八、戸を打ち壊せ——構わないとも、後は俺が引受る」

「よしッ」

平次の氣組に励はげまされて、八五郎はでっかい身体をドシンと雨戸に叩き付けました。

暫くの骨折で、どうやら斯うやら雨戸を押し倒して入ると、中は何んの変哲もなく、彼方此方に灯さえ点いて人の氣配もなく、更けております。

「八、穴倉へ案内しろ」

「へエ」

物置へ行って見ると、床は剥はいだまま、灯の用意をして無気味な中へ入ると、穴倉の櫳かしの戸のところへ、もうプーンと生血の臭い――

「あつ、遅れたか」

差し出した灯の中に、鮮血に染んで斬り殺されているのは、思いきや、主人の竹斎こと滝三郎の無残な姿です。

「あつ」

「八、小判は無くなっているはずだ。見てくれ」

「ありませんよ、親分」

穴倉の隅の箱は空っぽ、八五郎は呆気にとられて居るばかり、

「狭い穴倉の中で、良い手際だ。——これ程の男も、声を立てずに死んだらう」

穴倉から出て奥の部屋へ行くと、平次が想像した以上の贅沢な調度の中に、姉娘の多与里は、滅茶滅茶めちやめちやに縛られておっ転がされて居ります。

「あ、多与里さん」

「ア、ア、ア」

近寄る八五郎の顔を見て、啞娘は涙を流すばかり。

「待て待て、八、その縄を解いちゃならねエ」

平次は近寄ってよくよく縄の具合を見た上、静かに解いてやり

ました。

「お雪とお六はどうしたでしょう、親分」

「心配するな。裏の方の家で顫えて居るよ」

「行って見て来ますよ」

飛んで行ったガラツ八。其処には平次の予言に少しも違わず、妹娘のお雪は、婆やのお六と真つ蒼になって、唯うろろうして居るのでした。

七

「八、こいつはお前の手柄だ。よく落着いて考えろ」

「へエ——」

平次はお雪、多与里、お六の三人を下つ引の辰に見張らせ、駈け付けた近所の衆を、町役人と番所と、土地の御用聞のところへ馳けさせて、さて改めて八五郎に斯^こう言うのでした。

「まず、あの穴倉の金は、丸橋忠弥の遺^{のこ}した金じゃねエ。痣^{のこ}の熊吉が盗み溜めた金だろう。——それを滝三郎は折端詰^{せっぽつま}って、お前にやって口を塞^{ふさ}ごうとした」

「へエ——」

「お前という人間の正直さを知らなかったのだ。その滝三郎のへ

まさ加減かげんを見て、痣あざの熊吉は腹を立てた。こんな相棒を生かして置いちゃどんな失策しくじりをやらかすか解らないと思ったから、一と思いに殺して、お前にやると言った金を隠して了った。それは、辰に表を見張らせている。ほんの半刻ほどの間のことだ」

「――」

「お前には見当が付かないか、痣の熊吉は誰だ」

「滝三郎ですよ、親分」

「どうして滝三郎が痣の熊吉だ」

「外に男っ気がないじゃありませんか。それに滝三郎の腰に差していた尺八は、あんまり太すぎると思ったら、こいつは仕掛けも

ので、中に散目鋸ちりめのこと鑿のみと廻し錐きりが入って居ましたよ」

「そんな事もあるだろう。——それじゃ滝三郎を殺したのは誰だ」

「——」

「穴倉の中であれほどの業わざの出来る奴。小柄で、首筋に真赤な痣あざのある奴、——八、その紙入の中を見る。女持の可愛らしい品だ
が中には大変なものが入って居る筈だ」

「へエ——」

畳の上落ちていた赤い羅紗らしゃの紙入を開けると、小菊が二三枚

と、粉白粉ほんのうこうと、万能膏の貝と、小判形の赤い呉縞ごろうの布と——その

布の裏には、ベツトリ膏葉が付いて居るではありませんか。

「あッ」

おどろく八五郎、間髪を容れず、

「熊吉、御用だッ」

平次が一喝かつを喰わせるのと、巨大な赤い鳥のパツと飛ぶのと、部屋の灯が消えるのと、下っ引の辰が悲鳴をあげるのと一緒でした。

「八、曲者は外へ逃げた。お前は表へ行け、俺は裏から廻るッ」

平次の叱咤しつたにつれて、八五郎の身体は獵犬のように動きます。

幸いの月夜、疾風しつふうの如く逃げ廻る曲者は、次第に逃げ路を失って、平次と八五郎の狭めて行く輪の中に入ります。

「八、気をつけろッ」

言う間もありません。

脇差がとんで八五郎の眉間へ来るのを、かわすのが精いっぱい、

「野郎ッ、神妙にせいッ」

二た太刀目が八五郎の咽喉のどぶえ笛を狙って来る前に銭形平次の手

からは久し振りの銭ぜにが飛びました。二つ、三つ、五つ、曲者は額

と頤てのひらと、掌を打たれひるむところを、力自慢の八五郎が、後から

無手むずと組み付いたのです。

×

×

「痣の熊吉が、あの年増女の多たより与里とは気が付かなかった。驚い

たね親分」

一埒らっが済んでから、ガラツ八は今度ばかり九分通り自分の手柄にして貰って、すっかり好い心持になって居るのでした。

「俺も判らなかつたよ。だが、あの家は最初から怪しいとは思つた。——良い男は女に化けられるだろうが、声だけはどうすることも出来ない。啞おしになつて居るのは面白い考えだが、偽啞というもののはむずかしいものだ。多与里は随分上手に化けては居たが、気をつけて見て居ると、物音がする度に、瞳が動く。——耳が聞える証拠だ」

「なるほどね」

「瞳が動くのは本人は気が付かなかつたろう。——それからあの縛った結び目は非力な女だ。お雪かお六にやらせたと直ぐわかるじゃないか。———そう思うと、女に化けきつて居るが、多与里の身体にはどうしても女でないようなところがある」

多与里の縄を解いた平次は何も彼も見抜いて居たのです。

「なるほどね」

「赤い痣は最初から拵え物と判つたが、お前の口からお雪の右の頤の下に小さい薄紫の痣があると聴いて、熊吉はそれを手本にしたと判つたよ。手近のところ到手本がなければなかなかそんなうまい術は思い付かないものだ」

「お雪はどうなるでしょう。熊吉の隠した二千両の隠し場所を教えたのはあの娘ですが、親分」

「お前はそればかり心配しているが、熊吉の妹じゃどうにもなるまい。気の毒だが在所の遠い親類へ帰す外はあるまいよ。あの娘は何んにも知らなかったらしいが」

「それに私を助けてくれましたよ」

ガラツ八はそれが忘れられなかったのです。熊吉の多与里とお雪は兄妹ですが、滝三郎は赤の他人で、それが穴倉へ八五郎を誘さそい込んで、どうかしようとしたのを、どんなに骨を折さまたって妨さまたげてくれたことでしょう。

「お前のいうのも尤もつともだが——」

平次は考え込みました。兇賊痣の熊吉の妹では、まさか八五郎の女房にはなりません。

斯うして八五郎は、一世一代の大手柄に、拭えども消えぬ悲しい記憶きおくを焼きつけてしまったのです。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

娘 啞

初出―「オール讀物」昭和十六年八月号 文藝春秋社

底本——「錢形平次捕物全集」第六卷
河出書房 昭和三十一年七
月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>